

八月も末になると台風の情報も二度、三度とあった。関東をかすめるものはなかったが、九州南部の一部には、早々と台風の被害が出たりしていた。それでも、まだ、秋の気配がやって来たわけではなく、八月の季節はままに、かーつと照り付ける夏の陽射しが、大地を灼いていた。

立退きを求める封書が、内容証明書付きで送られて来たが左知子は開封もしなかった。一

北川洋子から一緒に、美里のところの赤ちゃんを見に行こうと誘われたがそれも断わった。

左知子はそんなことよりも、山岸拓郎に関心を深めていた。同じ放火犯同士、左知子は心の拠（よ）りどころを拓郎に求めたのだった。

もつとも左知子のことだから、愉しみの部分を二十歳の若者に押しつけようというところもあった。ファイヤーゲームの新しい展開に少しは心ときめかせてもいたのだった。

山岸家の犬小舎に火を放った翌日の午後、左知子はまた隣家の男にたまたま道で行き会い呼び止められた。

「左知子さん、来週の水曜日、またうちのやつがないんだよ。法事でね、実家のほうに出かけちゃうんだ。別になにしようってんじゃないんだよ。あんたの力になってあげたいんだ。家だつて立

退きを迫られていてたいへんなんだろ。お父さんじゃ話にならんし」

また親切ごかしのことを言われた。

「よく考えてみます」

とだけその時は答えておいた。

この日はよくよく嫌な人物に出会う日とみえて、ここ十日ばかり顔を見なかった桑原源吉に病院で顔を合わせた。梯吉が夏カゼを引いて薬をもらいに行つた時のことだった。

待合い席にいたら勝手に向うからやって来て隣りの席に坐つた。

「お前、わしのことを馬鹿にしてるんじゃないだらな。こう見えてもわしはコソ泥だとかそのへんをうろろろしているのぞきの常習者とかをな、もう三十人は捕まえているんだ。警察で表彰されたことだつて」

「その話は交番の人に聞きました」

「ああそうか、わかつていればいいんだよ」

「他に何かご用ですか」

「お前に用はないよ。お前がまた何か仕出かしたらのことだ」

「それじゃ、わたし」

左知子は席を立つ。早く薬をもらう番号札のランプが点けばいいと思った。

壁際に行き、立っていた。

すぐに番号が示され、左知子は薬を受け取ることが出来たので助かった。

帰りに、公衆電話を使い、山岸拓郎の家に電話した。家にはいないのか誰れも出なかった。

それでも、夜の七時頃再度電話したら拓郎が出た。それでまた真夜中に会うことにした。

「家にいるから来たら」と彼は言った。

家を出る時、左知子は鏡台の前に立つた。鏡に

自分の立姿を写してみた。

やっぼり自分の顔が気になった。

昨夜は、蒲団にもぐり込んだら、口紅のことが気になった。唇をなめた時、変な味がした。ティッシュペーパーで何度も唇を拭った。今夜は紅をさす気はなかった。

うっかり忘れていたが、昨夜出かける時、自分が仕掛けた細工のことを思い出す。

鏡台の抽出しを見たら、少しだけ開いていたが、一センチ幅の出っ張り部分はもつと少ないように思われた。念のために、左知子は自分がつけた鉛筆の跡をたしかめてみた。少しだったがたしかにずれていた。

それで、一度、抽出しを開けてみた。

昨夜並べた通りの順序に、化粧具があるかどうかを確かめるためにであった。口紅は右端にあつたし、パフやお白粉は中央辺にあつた。

が、どことなく乱雑な配置のようにも思えた。それは左知子の直感であつた。

梯吉がこの二階部屋に上つて来るのだろうか？だがこの考えはやはり頭の中で打消した。到底父の体では無理なことなのだ。

もう一度だけ試そうと思つた。

抽出しを閉め、鉛筆の印がつけられた場所に合わせて、一センチだけ抽出しを開けておいた。

この夜も、左知子は真夜中の街に出た。

行先がはつきりしていたし、アリバイだって用意することが出来るわけだから、自転車に乗つた。それで、数分で中原町の拓郎の家に着くことが出来た。離れには明りが灯されている。

離れの部屋は扉のロックがされていず、左知子はすつと中に入った。昨夜は部屋には入っていないのでこの日が部屋の様子を見るのは初めてだつ

た。拓郎は照れたような笑いを浮かべ、左知子を迎えた。

部屋に入ってみて気付いたのは、足の踏場もなほいほどに乱雑にものが置かれていることだった。ベッドの上にも学習書や、パジャマ、それに楽譜などが散らばっている。壁に張られたアイドルスターのポスターなどもピンが外れていたりする。それでも金色の管楽器だけは勉強机の上にきちんと置かれていた。

メタリックな銀色のカセットコーダーなども二台もあったが、捨て置かれている状態だった。脱ぎ捨てたシャツなどがそのままになっているせいもあったが、一種独特の男の体臭がこの部屋には充ちていた。

「ね、なにをやったの？」

拓郎は細い眼をしばたいた。落着かぬふうで、左知子はきつと彼が秘やかに自慰の行為に耽っていたに違いないと思った。

「CDを聴いてみる？」

借りていたトランペットソロのジャケットのこゝとを言った。

「いいよ。もう聴きあきたから」

黒い木枠の自家製のステレオ収納ボックスに黒い光沢を持ったステレオが収められていた。

スピーカーも手製で、一つはベッドの際、もう一つは左知子の足元に転っている。

「それじゃおはなしということにするか」

ことばに抑揚をつけ、左知子は胡坐（あぐら）をかいてみせた。北川洋子に聞かされた山岸拓郎の妙な性癖のことがちらと頭に思い浮かぶ。

女性の体に興味を持っているのはこの年なら当り前のことだったが、窃視者であることに左知子は強い関心を持ったのであった。だが、このこと

に今夜は触れるつもりはなかった。

「わたしのね、これまでの戦果、みんな聞かせてあげましょうか」

「うん」

「火を付けるとき、時には人が死ぬことがあるのよね」

「……」

素直に「うん」と頷いたのに、人を焼殺する話をしたら、急に拓郎の顔色が変わった。

「わたし、千葉の房総海岸に行った時にね、アベツクの乗っている車に火を付けたことがあるの。中でいちやいちやしていて、ガソリン撒いてやったものだから、火だるま。火あそびを罰してやったのよ」

左知子は筑波学園都市で橋口という男の赤い車に放火した話をふくらませ、口から出まかせのことを言った。

「それからね、わたしに文句ばかり言う老人がいて、その人自転車事故でわたしとぶつかったのよね。そしたら川越に住んでいる人だから電話掛けて来たりうるさくて仕様がなかったの。上野田町の田んぼん中の一軒家、一人住まいで足が不自由だったから、逃げ遅れて焼け死んじゃったの」これは桑原源吉のことを模した。

「わかった？わたしちよろいことばかりやっているわけじゃないのよ」

拓郎はベッドに背をもたせている。

長い脚が左知子の足元にまで届いていた。

裸の足裏が眼の前にある。

「ぼくは自分のこと、しゃべったりしないよ。そんなの馬鹿みたいだよ」

「へえ、あなたってちよろいのばかりやってるん

だ。郵便ポストとか、人のいない倉庫とか」「自分だってぼくのところの犬小舎に火を付けたくせに」

「ああ、あれ、あなたが眼を覚まさないから、目覚し時計代りよ」

「結構、強がりばかり言ってる」

「あら、そんなことないわ。わたしはファイヤーゲームではあなたの上を行くわよ」

「ファイヤーゲームか」

「そうよ。一つわたしの提案を聞いてみるつもりはない」

「提案って？」

「二人が警察に捕まらない方法よ。あなた知ってる？ 町内会のおじさんたちがさ、自警団作って夜になると回っているって話」

「火の用心だろ。でも、あれは今のところ午前二時まで。この前来た消防署の人がさ、放火時間は大体午前二時頃までだって言ってた。警察がだらしなないからだって、悪口まで言っていたよ」

「この街、いまどんどん人口が増えているから警察官の数が足りないのよ、きつと」

「この前なんか、消防士が自分で火を付けてさ、自分で火を消したって」

「熊谷（くまがい）の話でしょ。新聞に出てた。馬鹿よね。非番の夜にばかり火を付けて、自分で通報してさ、点を稼いでいるんだから」

拓郎の気持が和らいできた。細い眼も、瞼がそれほど動かなくなった。

それで左知子はずばりと提案してみた。

「どちらかが捕まることだってあるかも知れないでしょ。わたしね、もしあなたが捕まるようなことがあったら救けてあげるわ」

「ぼくは捕まらないよ。そんなへましないもの」

「あのね、今、警察は夜、自由に一人歩き出来る者のリストを作っているのよ。あなたなんか、お母さんが夜勤のホテル勤めしている時もあるからさ。まちがいはなくリストに名がのるわよ。わかる？それに二浪の受験生、あぶない、あぶない」

「きみだって隣りの奴に見られているんだろ」

「だからここはお互いに助け合わなくっちゃ、わたしたちのやってること、かなりヤバイことなのよ」

「わかってるさ。でも捕まったら助け出す方法なんてないと思うけどな」

「ほほ、別にね、脱獄しろって言ってるんじゃないの。お互いが支援活動をするの」

「まさか、そんなこと」

「いい、もしもよ、あなたが捕まったらね、わたしその夜に絶対にどこかに火を付けてあげる」

「……火を付けるって」

「そうよ。うんと派手にね。放火犯というのはね、ほとんどが現行犯じゃないと捕まらないのよ、現場にほとんど証拠が残らないわけ、ほら、今福のあなたんちの貸家、あの時の火事だって誰れが放火したかわかっていないんでしょ。連続放火犯だって警察は思ってたからそこが付け目よ。これまであなたがやったことみんな知らないって言えばいいの。捕まったとしてもあなたは現場を押しさえられたその一件だけ、あとは黙ってればいいの」

「そんなにうまくいくかな」

「あのね、これはあなただけのことじゃないのよ。もしわたしが捕まるようなことがあったら、あなたはその夜には必らず放火しなきゃだめよ。これはお互いの信頼を前提にした忠実義務事項なん

だから」

「へえー、凄いな」

「どう、ファイヤーゲームって意味わかった？」

「ぼくは絶対にきみを救けてやるさ。これ男の約束なんだから」

「ね、最初にわたしが、三人も焼殺しているって話したでしょ。なぜだかわかる？」

「それは……」

「もしかしてよ、わたしは絶対に約束守るのにあたたが守らなかつたらわたしはどうなるって思う？」

「そんなことしないさ。絶対に」

「あのね、忠実義務事項には、罰則事項もちやんとあるものなのよ」

「どうするわけ？」

「山岸拓郎が捕まっていて、わたしが忠実義務事項を守らなかつた場合、あなたはわたしの放火殺人行為を警察でしゃべるでしょ。サトウエツコがこういうことをやったって。あのバラック小屋に二度火を付けたことや、ここんちの犬小舎の放火、あなたは目撃者なんだから」

「凄く、頭いいんだね」

「だから、いい、わたしはあなたにどうしても訊いておかなければならないことがあるの。わたしはね、いろいろと調べた結果ではね、ほら一年前のあなたんちの貸家の火事、あの放火犯人はお父さんじゃなく、わたし、山岸拓郎だと思っているのよ。どう、ズバリでしょ？」

「……………」

左知子は拓郎の表情を余さず観察した。

たしかに うろたえていた。細い眼の表情に落着きが失くなり、見ていると左手の親指と人差指

が合わさりもぞもぞと動いた。

心なしか頬のあたりが、ぴくぴくと動いた。

たぶんに飛躍した考えだったが、単刀直入に左知子は切り込んでみた。

「ねえ、どうなの？」

まるで取調官のような口のきき方をした。

「……………」

「言えないの、言えないんじゃない、あなたを救ってあげないわよ」

「その話はもういいんだ……」

「いいんだって勝手に決めないで。わたしだって自分の秘密しゃべったんだから」

「でも……」

「だめよ。放火したのはお父さんかも知れないってことになってるけど、わたしはそうは思っていないの。それにね、そういうことって一人で胸にしまっておくの辛いことよ。わたしがしゃべったのも、誰れかに話せば少しは胸のつかえがとれるからよ。わかった」

「うん……」

「いい、もしあなたが捕まってこれまでのことみんなあなたのがやったことだと思われたらお父さんもあなたも二代続けて身を滅ぼすことになるのよ。自分だけでも身を守らなくっちゃ。わたしが救ってあげる」

拓郎は眼の端に少し涙を滲ませた。

もう左知子から見た心証はクロであった。

「ぼくはさ……」

ぼつりぼつりとはあったが、拓郎は自分の犯した怖ろしい犯罪のことを語り始めた。

山岸拓郎が戸室左知子に語った一年前の事件とは次のようなものであった。

東上線川越駅から一つ手前の駅、池袋寄りに新河岸駅がある。川越市今福という地域は、駅から数キロ離れた新興住宅地帯であった

その住宅地の一郭に、山岸喜代次の貸家はあった。二階建四DKで小さな庭が付いている。

この家を月八万円の家賃で借りていたのは古山健治という男で、貸してからわかったことだったが、この男は池袋を根城とする某暴力団の準幹部であった。

駅前の不動産屋に顔を出したのは情婦の小川弘子だった。その場で決め、即金で払っていったので契約が成立した。

少々化粧が濃目で水商売風だったが、ていねいな口をきいたので、それほど不動産屋も主人となる男の素姓までは疑わなかった。

ところが、半年ほどは家賃をきちんきちんと払ったが、あとは催促に行かないと払わないようになった。いつも出て来るのは小川弘子で、奥に男がいても玄関口には顔を出さなかった。

「三日後に来て下さい」と言われ不動産屋の男が集金に行くと、また「お金がないので二日後に来て下さい」と言われた。こんな繰り返しばかり続くので、そのうち不動産屋の若い男は頭に来て、乱暴なことばも吐くようになった。

「明日にでも出て行ってくれ」

「女だからと言って手加減はしませんよ」

「いいかげんにしろって。集金にばかり来てたんじやこっちは仕事出来ないんだよ。金がないんならその体を元手に稼いだらどう？」

とまで言ってしまった。そんな乱暴な文句を古

山健治はみんな録音テープに収録した。

困ったことに、この時、持主の山岸喜代次は事業の鉄工所経営が行き詰まっていた、多額の借金に追われていたもので、この持家を手離す気になつていた。

売却すると築造七年の家だったが、不動産屋渡しで千五百万円にはなるはずだった。

賃貸しを斡旋した不動産屋は、売却の話にも乗つたので、貸して八カ月目、代りの住宅をすぐ近くに用意する条件で、借主と交渉するよう山岸喜代次に言われた。不渡りを出すぎりぎりの状況だったので、かなりせつつかれた。

ところが、借りた相手が悪く、二年契約の途中解約、しかも一方的な貸主側の事情だったので話がこじれたら、多額の立退き金を要求されるのは必至だった。

それで不動産屋は一計を案じ姑息な術を用いることにした。家賃の支払いが滞っていることをいいことに、強硬に立退くよう求めたのであった。

この段階になって、この家の主である古山健治が表に出てきた。

逆に、収録テープを持出され、「お前たちは脅しをかけているのか」と切り出された。

相手は百戦練磨とみえて、決して激した語調ではものを言わなかった。持久戦の構えであった。

男の面構えや、出入りする若者の風体から暴力団関係者とわかつた時は、もうかなりの深味にはまっついて、山岸喜代次も何度か顔を出したが埒があかなかつた。

どこからか山岸喜代次が金に困つてこの家を売りがつて、聞くことを聞きつけてからは一層この男は泰然と構えるようになった。

文句を言われないように月々の家賃もきちんき

ちんとおさめるようになった。

この時、拓郎は最初の大学受験に失敗して家にいた。鉄工所は人の土地であったので、処分することは出来ず、急場しのぎに、拓郎の父は高利の金を借りた。父親は酒に溺れて、家でわめき散らすようになった。

この頃から母親は、昼はパートで町工場に行き、夜は十二時間勤務のラブホテルの従業員になった。夜のラブホテルなら少しは仮眠が出来るかと考えてのことである。

酒をのんだ父に拓郎は大学受験をあきらめるように言われた。

だが、この時、父は本心を彼に見せた。

『いつそのことあの家が火事にでもなればなあ。あそこは家が建て込んでいるから火災保険は二千万円分が掛けてある。あんな虫けらみたいな野郎共、焼け死んじまえばいいんだよ。知ったことじゃない。どうせ売ればそれ位の金だ。同じことだよ。畜生め、ダニみたいな奴に、住みつかれちまつて、あれじゃまったく誰れの家だかわかりやしないよ』

あとは、一人でわめき声をあげていた。古山健治らの悪辣（あくらつ）ぶりはもう毎日のように聞かされていた。

拓郎にも怒りの気持はあった。

なにより、大学受験をあきらめさせられそうなことに彼は憤りの気持を強くした。

もう少しで念願の有名国立大学に入れるところだった。補欠にランクされた。

一年頑張ればなんとかなると拓郎は思っていたのである。火を付けければ父親は助かるのだし、彼だって大学進学が夢が叶うのだった。

酔ったはずみに父親は持家に火を付けるかも知

れなかつた。その危険性は父親の追い詰められた状況を見ていたので充分に有り得ることだと思われた。

七月二十一日の夜、彼は受験勉強のための学習書を開いたが手に付かなかつた。

いくら勉強しても学資がないなら大学で学ぶことは出来なかつた。自分が火を付ければ……彼は怖ろしい想念に取り憑かれた。

何度か、その怖ろしい結果のことを考え、頭を振った。決意したのではなかつたが夜の街に出た。足は自然に今福の問題の家に向いた。

この時、彼は自転車を利用した。

距離はかなりある。自転車で二十分はかかつた。スーパーストアの角を曲がり、路地をいくつか巡つて、卓郎は目的地に着いた。

まだ明りはついていた。

午前一時を少し過ぎている。はじめ、彼は、勝手知つた庭の内に入り、中の様子を窺つた。

家の前の道路に車が一台停めてあつた。

そのあたりは暗い。

風呂場と台所のある裏手に回つた。

一メートルほどの高さの塀があり、建物とその塀との間隔が狭いので通るのに苦勞する。一階の居間から明りがもれていた。

窓が三分の一ほど開いていて煙草の煙がそこからもわーと外にもれていた。

男たちの高声がする。なにをしているのかすぐにはわかつた。マージャンの卓を囲んでいるらしく賑やかだつた。

「おい酒だ！酒！」と、古山らしい男が叫んでいる。あたりに筒抜けの大声だつた。

近所迷惑なので、前々から苦情も言われていた。たしかに傍若無人の騒々しさであつた。

途端に、彼はまるで我が家のように振舞っているこの家の連中が許せなくなった。

若者らしい怒りもあった。父親が虫けらと言ったことばの意味が少しはわかった。

「おい、弘子、イッパツつもれば、あとでどしんとリップモンでよ、イッパツ行くぞ」

古山が浮かれたことを言った。あとは卑猥な笑いが湧いた。そこで彼は決意した。

こんな連中にいつまでものさばられては一家の破滅になるのであった。

自分がやるしかないと思った。

一度、彼はここを退散した。

そして父親の経営していた鉄工所跡に行く。

川越街道に面した場所で、今福からそれほど遠くはなかった。いまは閉鎖されていた。

厨房器具や特別注文の食器棚や、鉄製容器を作る工場だったが、受注先の大手のメーカーの景気が悪く、急速に下請けの仕事がなくなった。

裏口はもう錠が掛かっていなかった。中の設備の目星しい品はすでに債権者に持去られていた。

明りをつけたが、三百平方メートルほどの敷地内は、歯の抜けたようになり、がらんとしていた。ここで彼は、時間の経過を待った。

午前二時に少し前であった。

放火に必要なものをここで取り揃えた。

ガソリンが四リットルのポリ容器に半分以上入っていた。容器は三つあったが、あとは空で、一つの容器だけにガソリンは入っていたのであった。かき集める必要がなかったので手間が省けた。

午前三時まで待った。

午前四時を過ぎるとあたりが白み始めるのではないかと考えた。奴ら徹夜マージャンをするのかも知れない。と考えたが、それならそれで明日の

夜決行するまでだと思つた。

いつもの受験勉強の日課のせいで少しも眠くはなかつた。自転車の荷台にポリ容器をのせる。かなり慎重にことを運ぼうと計画していたので、自転車の荷台には、油垢がつかぬよう布切れできれいに拭つた。

ガソリンがこぼれぬよう蓋もしつかりした。

人に見られぬように大通りを避け、寝静つた住宅街の路地路地を用心しながら走る。やや離れた場所から貸家を偵察する。

もう家の前に停まっていた車の姿はなかつた。

山岸拓郎は、充分にあたりの様子を見澄ました。自転車は近くの草叢に隠し、ポリ容器を手に、貸家に近付く。

もう、明りは消えていた。彼が去つて間もなく男たちはマージャンを止めたのかも知れなかつた。とすれば、この家の者は丁度寝入つたばかりの頃かも知れない。

人を殺すとか、殺さぬとか―それほどの考えが彼にあつたわけではない。

ただ、憎しみの情が湧いていた。

裏手に回り、ガソリンを壁に沿つて撒いた。

およそ三メートル余の領域であつた。

隣家との境は低い塀だったが、かいつかの樹が隣家の庭には並んでいたので、何とか延焼は防げるのではないかと彼は考えた。

ポリ容器を一度、道路のほうにもどし、それから、隣家の庭のかいずか越しに火の付いたマッチを投げた。あとは後も振り向かずに逃げた。

自転車のある場所にもどり、ポリ容器を荷台に、元来た道を右に左にと走り抜いた。

最初から考えていた通り、工場に帰り着き、そこで元通りの場所にポリ容器をもどした。

家に辿り着いたのは午前四時を少し過ぎた頃であつた。

その頃、今福の家は炎に包まれ、寝入ったばかりの男と女は逃げ遅れて死に瀕していたのであつた。当然状況から放火が有力で、警察の取調べも放火一本に絞られた。

初めは暴力団同士の抗争の結果ではと警察は考えた。この地域が対抗グループの縄張りであつたので、拠点づくりの一策ではないかと見られたことから、その筋の捜査が行なわれた。

疑わしき点はあつたがまだ小競合い程度のことで一触即発の状況にはなかつた。

立退き問題のこじれから不動産屋の男と、それから一応持主の山岸喜代次も参考人として呼ばれた。特に保険金のほうは多額ではなく、契約年も古いことから保険金狙いの放火事件という見解にまでは発展しなかつた。

だが、この家を早く処分したがつていたこと、多額の借金を抱えていたことから、山岸喜代次も一応のところ動機ありとみられた。

酒をのんだ席で放火したいものだと口走つたことも警察の耳には入つていた。

もつともすべて状況証拠であつて、放火犯人だと極め付ける証拠は何もなかつた。

が、警察の取調べ、借金取立ての男たちとのトラブルなどで山岸喜代次はノイローゼ気味の状態にあつた。住んでいた家を処分しろと債権者は押しかけたが、あいにく、この家は妻の弟のもので処分の対象にはならなかつた。

元々、今福の家に住む予定だつたのだが、千葉のほうにその弟が転勤になつていたので、彼ら一家はこちらに住み、今福の家は人に貸したという経緯があつた。

これは誰れも知らぬことだったが、七月二十一日の夜、山岸喜代次も放火を考えた一人だった。今福まで、夜中に出かけるには自転車しかなかった。持っていたライトバンは、もう、借金のかたに取られていた。

それなのに、この夜、自転車はなかった。足を奪われた父親は家にいるしかなかった。

それでもまさか、息子が火を付けるために行動を起しているとは思ってもいず、酒のせいもあつてうとうとしてしまった。

そのまま寝入ってしまった。

拓郎が帰って来たのも知らなかった。

が、朝の六時過ぎ、消防署から電話が掛かって来て眼が覚めた。自分の持家が半焼したことを知らされた。

胸がどきりとした。瞬間に息子の顔が思い浮かんだ。まさかとは思ったが、現場に行つた帰りに工場に寄つてみて息子に違いないと確信した。

ポリ容器のガソリンは彼自身が、放火のために一つの容器に集めたものだった。

そのポリ容器が空になっていた。

放火の疑いもかけられたので警察ではかなり厳しくいろいろなことを訊かれた。

その度に、山岸喜代次の頭の中には、息子の拓郎の顔が思い浮かんだ。

もしかしたら、自分は息子の放火のことをしゃべってしまったのではないかという強迫観念に日々取り憑かれて行つた。

動機のない放火だつてあるわけだから、息子の犯罪は目撃者がいない限り証明出来なかつたし、事件もはやむやのうちに終る公算が大であつた。

事実、そのような経過を捜査は辿っていたが、ある日、山岸喜代次が自ら縊死して果てたことで

、放火犯人は山岸喜代次だったのかも知れないと周囲は判断するようになった。

もちろん確たる証拠もなかったし、現実には、山岸喜代次は家にいたのだから目撃者が現われるはずもなかった。だが、山岸喜代次の『息子のことを口にしまうかも知れない』という強迫観念がもたらした死の結果、この事件は一応のところ落着いてしまった。死人に口なしであった。

結局、保険金は一年たった今も調査中ということで支抵われておらず、持家のあった土地は抵当に入っていたのでいま所有権はそちらに移っていた。結果としては一部の借金は返せたが、喜代次の思う通りにはならなかったのである。

拓郎が来年の受験を約されているのは、母親の弟が援助を申し入れていたからだった。

今年の春、本当なら有名国立大学に入れていたのに、勉強に実が入らなくなり前年より学力が落ちて受からなかった。

二浪の身になったのであった。

やはり、偶然の結果とはいえ、二人の男女を焼殺したことが、心に重くのしかかっていたのである。

3

左知子と拓郎は心を分け合った二人になった。

もつともこの関係は左知子の巧みな誘導から引き出されたものだった。つまりはサトウエツコの一人芝居が功を奏したのである。

拓郎は実際に七件の放火事件を起していた。

二人を焼殺した持家の事件を除けばみんなとるに足りぬものばかりであった。

ゴミ捨場の新聞紙、郵便ポストの中の広告のチラシ

紙、アパートの共同便所の扉、空地に置かれていた古板、物品倉庫など、いずれも人のいない場所ばかりを狙っていた。

拓郎が秘密を打明けた夜、左知子は隣家の男の嫌らしさ加減を彼に話した。

「ね、その男を退治してくれる。あなたがやってくれたらお礼にわたしキスしてあげるわ。そうね、恋人代りになつてあげようかな」

「そんな奴、叩きのめしてやるさ。ぼく、大人の奴だいきらいさ」

拓郎ものつてきた。

それで、まだ睫毛（まつげ）に泪のあとが残っている彼の眼を、ハンカチで拭いてやり、左知子はいつか、樹里少年にしたように、拓郎を正座させておいてから、眼を閉じて、神妙に控えている拓郎の唇にそつと口づけをしてやった。

いつだって口づけまでの行為なら気持がよい。左知子は乱暴に挑まれると困るので、拓郎の気持ちを慰無するつもりで、やさしく接した。

この日の三日後、左知子は、拓郎をけしかけて田尻義和に製肘（せいちゆう）を加えた。

この男の素姓が知れると、自分の名前も住所もわかってしまうので左知子は一計を案じた。

毎週一度、田尻は連雀町にある病院に行く。

少し糖尿病気味で「この病気はずっと薬をのんでいなければならぬんだ」と左知子に告げたことがある。道で出会った時の話だったが、ことさらに親しそうな顔をし近付いてきて関係もないことをべらべらとしやべった。

注射治療もあるので、毎週金曜日の午後、彼は通院していたのだった。

午後二時、丁度、午後の受付けの一番が田尻の順番であった。

中に知り合いがいて特別扱いされていたのだ。

病院の駐車場で拓郎と一緒に待った。自転車で乗って太った中年男がやって来た。

「あの男よ。わたしはこれでおさらば、徹底的にやっちやつて！戦果を期待しているわ」

けしかけるだけ、けしかけておいて、左知子はその場を後にした。顔を見られてはまずかった。

拓郎は十五分後、病院から出てきた田尻に近付き、「ちよつと話がしたいんだけどおれと一緒に来てくれないか」と誘いを掛けた。

「なんのことだ、おまえ」

強がってみせた田尻だったが、拓郎の次のことばで態度が変わった。

「おれの女のことと話があるんだよ。そう言えばわかるだろ」

「ふーむ、そういうことか」

とだけ田尻は答えた。そのまま連れ出された。

病院の裏手に神社があった。幼児を遊ばせている母親や老婆たちがいたが、拓郎は人のいない社（やしろ）の裏にと田尻を伴った。

まだ、田尻は自転車を引いて歩いていた。

ひやりとした涼しさがある。日陰に立った時、いきなり拓郎は男の頬に一撃をくれた。

話合う前のことだったので、田尻は少し油断をしていた。自転車ごと、後に引っくり返り、倒れて来た自転車の下でもがいた。

起き上ろうとするところもう一発、中腰の姿勢で腰を貯め次の一撃を加えた。

太っているので動作が緩慢であった。

「このヤロウ！」と口では言ったが田代はまだ起き上れないでいた。拓郎は続いてスニーカーの裏で、男の顔を踏み付けた。

「おい、話があるんだろ！」

「うるせえよ。サトウエツコはおれの女なんだよ。このブタ野郎！」

思い切り、顔を踏ん付けたので、田尻の顔は泥で汚れた。鼻血が流れ出ていた。

「サトウエツコ？…おい、おれはそんな女なんか…知らないよ」

そう田尻は言ったが、その前に拓郎はその場を後にしていた。何かわめいている男の声は聞いたが、足早に神社の境内を通り抜けたので、田尻の問いかけは耳に入ってはいなかった。

左知子があとから拓郎に聞いた話では「あいつの体ぶよぶよとしていて蹴っ飛ばしても、人間の体って気しないんだよな」ということになる。

この日、拓郎と病院前で別れた左知子は、連雀町の中央通り商店街で、和彦と美里の姿を見かけた。赤ん坊は両親にでも預けてきたのか、二人は仲睦じく腕を組んでいた。

また左知子は嫌な気になり、眼をそむけたが、知らぬ間に二人のあとを尾けていた。

板囲いの八百屋の店先には玉蜀黍が高く積まれていた。その店の前で、一つを手を取った美里が何か和彦に話し掛け、笑っていた。

半袖の水玉模様の入ったブラウス、中ヒール、ハンドバッグなども肩にしている、どう見てもデート中の若者に見える。

和彦だって、モスグリーン系のかっこいい襟なしシャツを着込んでいた。

ぶらぶらと歩いているので、二人との距離が詰まりそうになった。時計屋の店先でショーウインドウを覗き込む。余り高級品は置いていない。ミッキーマウスやドナルド・ダックなどの絵が

配された目覚し時計が眼に入った。

子供の部屋に行くと、どこにもある代物である。左知子は赤ん坊のためにああいう代物が必要なのだろうか和马鹿なことを考えた。

眼を二人に移すと、手打ち麺で名を売っているそば屋の店先に立っていた。暖簾をくぐり二人は遅い昼食をとるために中に入った。

これ以上、二人を観察していること自体が、左知子には馬鹿らしくなった。

この夜、九時過ぎから雨が降り始めた。

拓郎に会ってみたい思いもあったがどこか気が重かった。田尻義和に製肘を加える行為は、考えてみれば自分の素姓を拓郎に明かすことでもあった。病院へ行き訊ねれば、田尻義和の住所も名前もわかる。その隣りの家に住んでいるのだから、拓郎が知ろうと思えば、かんたんにわかってしまうことであつた。

どこまでが正気なのか、左知子は支離滅裂な思考と行動をこのところ、とっていたことになる。

結局、雨は一晚降り続いていて、左知子はわが家に閉じ込められることになったが、鬱屈した思いは梯吉も同じなのだ、近頃は考えるようになっていた。

左知子は二階部屋にいた。

梯吉の近くにいたことが嫌だったのだ。鏡台の抽出しはやはり、左知子以外のものが開閉したあとが歴然としていた。鉛筆のしるしどころか、一センチほど開けてあつたのに抽出しは、ちゃんと閉められていた。

左知子のいない間に、母の芳枝が帰って来るわけもなく、鏡台に関心を持つ人物は父の梯吉以外にはなかった。そのことに思いをつなぐのは、気の重いことであつた。何のために……考えるのが

嫌だから、鏡台の抽出にはそのまま手を付けずにいた。自分の思考を一時停止したのであった。

この夜は、昨夜の疲れもあつてぐっすり寝た。眼が覚めてみると、まだ雨が降っていた。

カーテンを払うと、青桐の葉が雨にぐっしより濡れているのが見えた。少し肌寒い。

午後になって雨は小降りになった。

やはり下腹に重い感覚があり、この日は何をするのも大儀だった。

不思議なもので、山岸拓郎とまるで恋人同士のような日々を持ったのに、もう一つ左知子は気が乗らなかつた。三つ、左知子のほうが年上ということもあつたが、男と女が付き合う時のときめきの気持が余りなかつた。

それで、やっぱり、和彦のことが何となく思われた。きのう、親密なところを目にしたせいもあつたが、何とか和彦を自分のほうに引きつけておきたいと考えた。

もう夏休みも終りの頃だから、和彦の休暇も数日しかない。そう思い立つと矢も楯もたまらなくなり、左知子は雨の中を公衆電話のある場所まで出かけて行つた。

いつかと同じ状況であつた。電話ボックスは雨に濡れていた。そこだけ雨を遮ぎつた特殊な場所になっている。この前と同じことになりませんように：と十円玉を受口に落す時に左知子は祈ってみせた。

発信音が三つ聞えた時、受話器が外された。

当の和彦が受話器を取つた。

「和彦お、よかつたあ」

佐知子の声は弾んでいた。

「ねえ、マフラーの色、何色だと思う？もうわたし編み掛けているのよ」

「いいよ、ぼくは、そういう話は……」

左知子はまだ毛糸も買っていない。

「なによ。そばに美里がいるの？」

「いや、本宅に行ってるよ」

「わたし、会いたいの、今からでもいいわ」

「そんなの、調べものだってあるしさ、これで結構忙しいんだよ」

「なに言ってるの、二人で手をつないで蔵造りの街通りなんかを散歩していたくせに」

「そんなことないさ」

「きのう、わたしちゃんと見ちゃったんだから」

「……」

「ね、ほんと、家の中でくすぶってないで出てらっしゃいよ」

「馬鹿なこと言ってるよ。何のために二人は会うんだ」

「ね、真面目に聞いて。わたしね、いま、放火犯人に間違われているの。わたしって、ねえ、そんなふうに見える？だから和彦に相談にのって欲しいのよ」

「そんなふうって……」

「夕方じゃだめ？」

「うん……」

「和彦、調べ物をさーと済ませばあ、夕方なら体あくんでしょ」

「まあね」

「それじゃ決まり、夕方の五時半、ほら、いつかの時の鐘の櫓の下、三十分もすれば、六時の鐘の音だつて聞けるわ。雰囲気あるわよ。きつと」

「ともかく、もう勘弁して欲しいよ」

「ね、最後のお願い、そんたふうに言われるとね、わたしほんとにどっかに火を付けそうな気持になるの。だから救けて！これ大事な話よ。五時半

に、ぜったいよ」

「ああ……」どこか気のない返事だった。

「よかった。和彦のマフラー、持って行ってあげるから」

さつきは編みかけていると言ったのに、今度はもう出来上っているようなことを口にした。

均衡を欠いた話だった。

公衆電話ボックスに雨は打ちかかっていたが、それほど激しくはない。

今日の雨はやさしくガラスの表面を撫でているように左知子には思えた。下腹の鈍い痛さの感覚も、左知子は一時的に忘れた。

気持が、落着かなかった。正気の部分もあって母の残していった婦人雑誌の付録を繰りマフラーのデザインを探した。きのうはオリーブグリーンのシャツを着ていたから、その色にしようかななどと考えてみる。

家は五時前に出た。少し寒いので、Tシャツの上に合いのカーデイガンをはおった。

雨が上りますように……願を懸けたら夕刻、雨は止んだ。和彦は来るのか、来ないのか、淡い望みに左知子は望みを託した。どこか頼りなさそうな返事にふっと自信がなくなったりした。

夕刻のことで、賑やかな通りには、買物をする主婦の姿があった。

雨が止むのを待っていたかのようにでもあった。時の鐘の櫓門前は鐘突（かねつき）通りと呼ばれている。四メートル幅の道路で、櫓門前近くに何軒かの商店が並んでいた。

肉屋に果物屋、何でも揃っていきそうな食料品店、主婦たちがこの一郭には目立った。

雨空のせいで、いつもの日にくらべあたりはかなり暗くなっていた。雨は止んでいたが霧状にな

った雨の粒が、やや視界を悪くしていた。

櫓門（やぐらもん）をくぐり、境内に入る。

正面の御堂のそばまで歩く。

踏石の両側は軒を接した民家の台所口で、左知子が歩いて行くと右側の家の台所から醤油の焦げる香ばしい匂いが伝わってきた。

台所の隣りは風呂場で、もう蛍光色の明りが灯されていた。小学生なのか、男の子が二人風呂場でははしゃいでいて、その弾けた声が外まで聞えていた。

急に暗さが沈んだように思えた。

御堂の輪郭が黒く隈取（くまど）られている。

絵馬が木格子の扉にはいくつも掛けられていた板に記された「め」の文字が読み取れた。

五時を少し過ぎていた。

あと十五分程で和彦は来るはずであった。

左知子は一枚の絵馬を手にとってみた。

細いマジックペンで書かれた、たどたどしい文字が眼についた。

「あとしばらくの命です。それまでわたしに明りを下さい。どうかいまより眼が悪くなりませんように。」

左知子はもの哀しくなった。

読むのではなかったと思った。

ただぼんやりとあたりを眺めていた。

暗さの寄せて来る感じが手に取るようにわかる。雨に濡れた踏石を一つ二つと数えながら歩く。眼の前に時鳴鐘の高い塔があった。

霧のせいで少し、上部の鐘撞堂はかすんで見えた。顔を上に向け、ずっと十六メートルの空の高さに眼を止めていた。

何分かその場に立つ。五時半は過ぎていた。

和彦はまだ姿を現わさなかった。

いま、どこに、自分は立っているのか、危うい
思いしかなく左知子の足元は揺れていた。

ただ、眼の前の鐘楼の四つの支柱だけが、どっ
かと地面を穿っている。

ますます、鐘撞堂を背景にした雨空は昏くなり
、その上に白い霧がかかって、左知子の見ている高
処（たかみ）の空は暗い靄に包まれて行った。

。和彦は来るわけがない……来るわけがない……
と口の中で眩やいていた。

考えてみればもう秋は近いのであった。

夏の終り、そよと吹く風も冷たくなっていた。

。わたし、何のために和彦を待っているのかし
ら……別にその答えを見つけ出そうとしていた
のではなかった。

あくまでもそれは眩やきであった。

こつこつと石畳の上を歩く。

行ったり来たり、誰れかを待っている仕種だっ
たが、もう、左知子はあきらめていた。

ただ、この場を去る踏んざりがつかないだけの
話であった。もう三十分は待たされている。

と、その時、ごおおーんと六時を知らせる時の
鐘が鳴り響いた。身を打つほどの大きな音ではな
かった。だが左知子は鐘の音に目覚めた。

三十秒毎に一つ、自動装置のつけられた鐘は正
確に時を刻む。

やはり、身を打たれていることには変りはなか
った。急に、この場にたたずんでいることの空し
さを知らされた。待合わせの時間から三十分も過
ぎていたのだ。和彦は来るはずはなかった。

はじめからそんなことは、わかっていたことな
のに……。鐘撞堂の暗さのことを思うと、そこに
怨めしげな顔をした幽霊がいそうに思えた。

それだけ、鐘の音は陰々滅々の響きを左知子に

伝えていたのであった。

一歩、二歩と、帰るために歩き始める。

またごおおーんと鐘の音が地に下って来た。

左知子は寒さを感じた。

霧雨が降っているのでもないのに、はおったカ
ーディガンの上にしっとり雨の粒が降り積もっ
ていた。

寒いと思ったたら雨の微粒がびっしりと毛糸の上
にくっついてた。

さっと手で払ったら、毛玉についた雨の粒々は
一斉に飛び散るだろうか？

そんなことを左知子は考えた。雨の冷たさが自
分の体から女らしさを奪ったのだと見当違いのこ
とを考えた。

恨み言を言いたくなかった。

寒さが自分の心まで寒くした。ぶるると全身
をふるわせ、その冷たい水玉をいっそのこと一気
に、左知子は払いのけたくなった。

4

食欲もなくその夜は左知子は何も口にせず眠
りについた。体がだるかった。

どうやら風邪を引いたらしく、夜半になって熱
が出た。寒気がして蒲団を眼深かにかぶったが、
体中がぞくぞくしてきた。

湿った蒲団に重さを感じた。

それでも、いつか眠りについていた。

左知子は熱にうなされていた。

その熱のせい幻覚に似た妙な夢を見た。

夢うつつの定かならぬ闇の中に、いつの間にか
男と女の妖しげな相姦図が入り込んでいた。

それは誰れとも知れぬ人の影で、左知子には肉

体の一部しか見えてはいなかった。

どうやらそれは隣家の浴室らしく、そこだけ明るい、眼下の痴態が見え隠れしていた。

嫌らしい感じの毛だらけの脛と、ぶよぶよした白い尻が絡まっていた。

何日か前、左知子は同じ情景を眼にした。

が、いつか、夢の絡まりは別の構図を左知子の頭の中に描き出していた。

何年か前の筑波学園都市にいた時の生々しい場面が夢の場に持ち出されていた。

あれは、和彦と美里が慣れ合った仲になった時のことであつた。

川越の実家に左知子が帰っている間に二人は抱き合う関係になつていた。

妬ましい思いを持ち続けたある日、学園内の会館で二泊三日の教育学のカリキュラムが組まれた。共同生活を通して日常の規律を学ぶことと、テーチインに参加させることが目的であつた。

夕食前、参加者は共同浴場に入る。

体に自信のない左知子は一日目、余り目立たぬ隅つ処の場所を選んだ。

二日目、洗い場に望んだ場所がなく、左知子は中央辺に腰を据えた。

横に細長いタイル造りの台があり、顔が向い合う高さに横長の一枚鏡が嵌め込められていた。

鏡の下辺とタイル台の間には十センチほどの隙間がある。見るともなく見たら、左知子の斜め前の位置に美里の下半身があつた。

腰回りの豊かな肉付きをしていた。太腿も左知子の倍近くはある。しゃぼんの白い泡が、首のない女の太腿には塗りたくられていた。

たしかに女の魅力に充ちていた。

和彦と抱き合うことが出来なかつたのは、病氣

のせいだったが、左知子は美里がその女の魅力に充ちた下半身で和彦を引きつけたのだと思った。

男を受け入れた部分が赦せなくてじっと視線を注いでいた。太腿の外側から内側へ、内側から外側へと美里はタオルをこすりつけ肌を磨いていた。洗い終り、湯桶の湯が勢いよくかけられる。

美里は不用意に股間を開いていた。

股間にある黒い飾り毛が見えた。

処女ではない女のその部分が左知子には不潔なものに思えた。まだ稚なく見える飾り毛なのに、どこか、存在感を示しているかにも見える。

その部分を、佐知子は見ているくせに、おのれの眼はまた別のものを捉えていた。

両眼の吊り上った細い眼の女が自分を睨み付けていた。それは左知子自身の顔であった。

正面に鏡があった。正視出来なかった。

が、視線を泳がせた時、また、美里の艶やかな下半身が眼に止まった。自分の上半身と、向う側の美里の下半身が一つになっていた。

小づくりの醜い面と貧弱な双つの乳房、それなのにこの女の下半身は豊かで眩ゆく輝やいていたのだった。……嫌な記憶だけが甦っていた。

夢の中では左知子の幻覚のなかに美里らしい女の下半身が浮いて出、それがいつかぶよぶよの醜い肉塊に変っていた。隣家の中年男に姦されているのは他ならぬ美里自身なのだった。

少しは眠ったのか、眼が覚めた時は、朝の陽が高く昇っていた。頭の芯がずきずきする。

湿ったきのうまでの空気は払われていたが、左知子だけはまだ気の晴れぬ朝を迎えていた。

それでも左知子は気丈に一日を過ごした。

父の前ではいつもの自分のように振舞った。この日は特に父に頼まれ、庭の小菊の鉢の手入れ

をした。元気な時は父は秋を迎えると、この多年草の小輪の花を見事に咲かせた。

左知子が元気そうに振舞っていたのは、今夜の計画を見事にやってのけたいからだった。

左知子は仙波町の和彦と美里の新居に火を放つ決心をしたのだった。それは神のお告げのように左知子の脳裡にひらめいたことであつた。

また、金融屋の男から電話が掛かつて来て「あと五日だよ。わかつてるだろうな」と言われた。

脅迫文を受け取つたことなど左知子は忘れていた。考えたくないことはすべて思考を停止したので、この男たちが脅迫文の主なのかどうかも詮索しなくなつていた。

昼間、二階部屋で仮眠をして夜に備えることにした。拓郎のことも考えたが、少し面倒臭くなつていた。いまは、和彦の「裏切り」が左知子は赦せないだけのことだった。

ところがこの夜、左知子が真夜中の街に出ようとした時、思いがけないことが起つた。

午前一時になろうとしていた。

ナップザックを用意し、その中にベンジンと古新聞紙を忍ばせた。ここまで大掛りに準備したことはない。左知子の決意のほどが知れた。

奥の六畳間を見ると梯吉はよく眠っているように見えた。出かけるべく、玄関口へと一步、足を運んだ時だった。

「うえっ、痛え！おい、左知子！」

と梯吉が大声をあげた。

不意のことだったし、体を玄関口に向けた時だったので、左知子はほんとうに驚ろき、体をびくつと震わせた。

「ねずみだあ、おい、ねずみだあ」

呼びつけられて六畳間に行つてみたら、梯吉は

左の手を押さえ、「あそこだ、あそこだ」と部屋の隅を指さした。

左知子はその方角を見たが、もうそこにはねずみの姿はなかった。

「おい、こんな大きな奴だ。うとうととしていたら、そいつがわしの手を噛ったんだ」

梯吉のしゃべり口と、手付き通りだと、十数センチの体長のねずみということになる。

左知子は薬箱を持参し、赤いヨーチンを梯吉の指に塗り、ほうたいをしてやった。

「まったく、寝そびれちまったよ」

お陰で左知子はあるこれと用事を言いつけられた。おしめの取り替えをさせられ、だるいというふくらはぎのマッサージを丹念にさせられ、それから夜食のつもりか、握りめしを作らされた。

これでは真夜中の街には出て行けないので、二階部屋に置いてある日本酒を、コップ一杯、梯吉にすすめた。

が、これは逆効果で、催眠のための酒だったのに、久し振りなものだから、梯吉はいかにも惜しそうにちびりちびりと飲んだ。

なにやら上機嫌で、

「わしはあいつがもう直き帰って来ると思う」

などとしやべりかけてきた。

「わしは夜寝なきやいけないわけじゃない。夜も昼もなしだ。これはあくせく働らいている奴のことを考えたら、いいご身分なのかも知れんな。ま、それでも思わんとこの体だ。とても生きている気はせんからな。立退きがどうだかだつて言つたつて、こうやって寝ているものを、棒で追い立てるわけでもないだろ。腹をくくったら怖いものなしだ」

散々しゃべった揚句、梯吉は頃合いを見計って

、また、二階で寝起きしたい旨を告げた。

「なんとということはないがな、昔は二階部屋は夫婦の寝室だったんだぞ。足腰立たんと思つたらほんとうに駄目になっちまうそうだ。わしはもう一度、若い気になりたいんだよ。だいいち、そういう気の持ち方はわしの病氣にもいいことだしな」
「わかつた。考えとくわ」

左知子は忘れていたことを思い出した。

二階部屋にこだわりをみせる父親に別な意味で関心を持った。父には秘密があり、二階部屋に住まねばならぬ理由でもあるのだろうか。

だが、この時は、火の行為を邪魔立てされたので、機嫌が悪く、左知子はこの日もいいとは言わなかつた。そんなことをしているうちに、午前三時を過ぎてしまった。

とうとう左知子は機会を逸してしまった。

和彦と美里の家を往復するのは時間がかかる。

この夜はあきらめざるを得なかつた。

5

その翌日の夜、左知子は、父に命じられ、ねずみ獲りに熱中することになった。

昔使ったことのあるねずみ獲りの金網の籠を、物置き庫から取り出す。

錆びていたが、かたちは崩れていなかった。

昼過ぎ頃から、長々と梯吉の講釈が始まった。一昔前はねずみ撲滅のために、ねこいらすが、どここの家にも置かれていたと、得意気に話した。

おびき寄せる餌は糠（ぬか）がいいと、古いことを言い、母が漬物用に残していた糠を探し出す役目も負わされた。すっかり糠は湿っていた。

次に、また、父の指金でフライパンで糠を妙（

い)った。ねずみは油っ気のものが好きで、特に糠の香ばしい匂いに引き寄せられる習性があると父は言った。

左知子はつなぎに御飯の残りを入れ、ねずみには食べ頃の小さな団子を、いくつか作らされた。

ねずみが出入りするのは、父の枕元にある床の間の袋戸棚のようであった。

そこには、菓子類や、食べ残しの夜食などがよく入れてあった。父の手の届く範囲内だから、水屋代りに使われていたのである。

糠団子はこの袋戸棚に撒き餌として散らぼし、糠団子で道筋を作ってその先にねずみ獲りのバナ式の籠を置いた。

「ほんとうはな、袋戸棚の中の出入口を塞いでやるといいんだが、そうすると、また別のところに穴を開ける。大体が出入口は大低は雄のねずみなら一カ所だ。雄には自分の持場があるからな。だがねずみの奴は頭がいい。ほら例えばだな、袋戸棚の戸を二カ所開けておくと、必ず狭いほうから追いつけると出て来る。狭いほうが自分たちの出入口だと思っているわけだ」

父は上機嫌であった。

だが、また左知子は憂鬱な思いになった。

ねずみ番でも父がしているつもりなら、また今夜も外には出ることが出来ない。

昼間、拓郎の家に数度、電話を掛けたが居なかった。近く演奏会のための合宿があるかも知れないと言っていた。市内の伊佐沼湖近くの公共の宿泊施設にでも行っているのかも知れない。

そんな話を聞いたことがある。

左知子は、まだ、和彦と美里の新居に火を付けることを考えていたが、一晩たったら少し考えが変わった。今度は正気に返っていた。

火を付ければいちばん最初に疑われるのは自身であった。電話で「火を付けるか知れない：」などとも口走っている。

筑波学園都市で過ごした学生時代のファイヤーゲームの遊びだつて表に出されることになる。

だが、この夜、左知子は気持が焦立っていた。まだ熱っぽく体もだるかった。

そのくせ、神経ばかりが目覚めていた。

夜の十二時過ぎ、どうやら父は寝入ったようだった。だが、左知子は疑心暗鬼の心持ちだった。

「死んだふりして寝ていればな、ねずみの奴、妙り糠の匂いにつられて絶対に顔を出す。わしの手を噛った奴だ。復讐してやらないとな」

意気だけは軒昂（けんこう）だったが、もう父は、珍らしくテレビを消していた。

真暗闇の中で軽い軒をかいていた。左知子は、なにか不自然なものを感じた。

ねずみ獲りの条件を万全にするための真暗闇作戦かとも思えたが、いつになく、父の態度に左知子は作弄的なものを感じた。

それで、この夜、左知子は父を試す気になった。脅迫文の主が誰れだかはわからなかったが、まだ父親だったのかも知れないという考えは捨てていなかった。

もし、這いずつても歩くことが出来、立上ることが出来たならである。

左知子は真夜中の散歩に出るふりをした。

玄関扉は開け放っておき、一旦外に出た。

玄関脇に小さな樹であったがあおきの植え込みがあった。その場所に屈み込み、人の気配を窺った。これまでのことを言えば、途中で左知子は家に立戻ったことはない。

大体、二時間か三時間、夜の街を彷徨する。

子が親を見張るなんてと思う。が、あるいは父は自分を毎夜ちゃんと見張っていたのかも知れなかった。

金が掛かるので新聞を購読するのを止めると言ったら父は怒った。何か、放火事件と娘の外出との符牒（ふちょう）を、そこに見つけ出そうとしているかに左知子には思えた。

そうだとしたら……いや、左知子の興味はもつと別のところにあった。鏡台の抽出しに仕掛けた鉛筆の印の場所がまた動かされるかも知れない。

そのことをたしかめる必要もあった。

隣家はもう明りが消えて、青白い月の光が平屋建ての低い屋根の輪郭を浮き出しにしていた。

あれから隣家の男とは顔を合わせていないが、サトウエツコの正体は、すでに、田尻義和にはわかってはいるはずであった。

左知子に男がいるという話を、田尻は耳にしているのだった。乱暴な仕打ちで打ちのめされたことは、頭の中からは消せない話であった。

およそ、三十分ほども待った。

雨上りの日のことでまだどことなく空気は湿っていた。梯吉は死んだふりして、ねずみを捕まえるまで息を詰めているのだろうか？

が、左知子は微かにではあったが、家の中の暗闇に異変を感じた。

「おい、左知子……左知子……」小さな声だった。

左知子を呼んでいたが、それはいつもの用を言いつける時の命令口調とは違っていた。

少し臆病そうな、探りを入れるような呼声に聞えた。またしばらく沈黙があった。

いつか左知子が眼にした同じ光景が暗闇の中では展開されようとしていた。

はつきりと見たわけではない。

床を引き擦るようなぎくしゃくした音を耳にした。あー、あの時と同じことが……両肘を使って玄関先に這い出て来た時の、梯吉の懸命ぶりのことを、その時、左知子のはつきりと頭に思い浮かべていた。

真夜中にー父もまたわが娘と同じように単独行に身を委ねようとしている…。

左知子は息を詰めて、父が成し遂げようとしていることを暗闇の隅から見守った。

もう、たしかに玄関の上り框の板の間にまで這い擦って来ているはずだった。

もちろん、梯吉は、玄関先の植え込みに隠れている左知子の姿には気付いていなかった。

そつと左知子は植え込みから出た。

少し開いたままの玄関扉の隙間に顔を寄せ、中の様子を窺った。

ちようど、梯吉は階段の下におり、今から、階段の一つに取り付こうとしているところだった。

もう、自分の行為に夢中で、梯吉は背後にある人の眼などに気を配る余裕を失なっていた。

「あつ」と左知子は小さく呟いた。

這いつくばったままの奇妙な恰好だったが、それでも、一段一段と、梯吉は二階部屋に通じる階段を上って行く。仄暗い場所なので、左知子に一部始終が見えていたわけではないが、梯吉はたしかに、自分の意志で、しかも自分の手と足で、急な階段を上っていた。

左知子は、この時、玄関口に入り、階段横の死角の場所に隠れた。もう、板の間に立っていた。

どうやら梯吉は二階部屋に辿り着いたらしい。足を引き擦る音はしなくなった。

どうしても左知子は父の秘密を暴きたくなかった。上って行って、何をしているのか、その現場を

つぶさに見てやりたかった。

が、不意に訪れたら父は狼狽し、ことばを失なうと思つた。

何が行なわれているのか？

それは余りに禁忌の匂いに充ちていた。

しばらく、上り框の板の間で、左知子は思案していた。が、自分の気持を押さえ切れなくなっていた。もう三十分ほどもあれこれと考えていた。

その結果のことだったが、意を決した。

階段にそつと足を掛けたされていた。

二階の部屋は明りが灯されていた。

細心の注意を払い、一つ、二つと数えながら階段を上つた。時折りはみしつと踏板が鳴つた。

そんな時は、しばらくその場に止どまり、二階の反応に気を注ぐ。急な階段だったので一方側だけ手摺りの丸太が付いていた。

なるべく、その手摺りで体重を支え、片足立つような恰好で左知子は階段を上つた。

二階部屋の前には廊下があつた。

その廊下の向つて右側の端が襖の入口になる。

それで三メートルほどは奥まつた入口に至る廊下を進まねばならなかつた。

左知子はたとえ気配を知られても、顔さえ見られなければ、素早く身をかわせると思つていた。

父の体は不自由なのだった。

まったくの静けさがあつたのではない。

なにやら二階部屋の奥では人がいることを知らせるに充分な物音がしていた。

言つてみれば、それは箆笥を開ける音のようでもあり、また問題の鏡台の抽出しを開ける音のようにも聞えた。

やはり、見たくないことではあつた。

左知子には初めから嫌な思いが付きまつてい

た。それでも、ここまで相手を追い詰めて来た。もうあとには引き退がれなかった。

襖の、十センチばかりの隙間に左知子は顔を近付ける。立ったままの姿勢であった。

父の眼がこちらを向いていないことを願う。そして眼を押し当てた。「あっ」と叫びそうになった。梯吉は箆筒に掴まった姿勢ではあったが立っていた。それだけではない。素っ裸であった。

やや斜め後の姿を左知子は眼に止めたのだが、危うい恰好だったがちやんと立っていた。

梯吉が支え木の代りにしているのは、半ば開け放たれた箆筒の抽出しだった。

もつと想像を超えたことが次に、左知子の目の前で行なわれた。もう、その行為に夢中で梯吉は背後の眼には、まるで、気付いてはいなかった。

箆筒の抽出しから母の愛用していた着物の白い長襦袢（ながじゅばん）を取り出した。

その長襦袢を箆筒の端に掛ける。それから、すでに、取り出していたのか、母の芳枝の大きな下穿きを手にし、片手で体重を支えながら、その古びたパンティをはこうとした。

とても危うい感じで何度か、よろよるとなり、畳の上に倒れそうになった。ずっと左知子は父の後姿を見ていた。萎えた、細い脚と、生気のない腰、男の体には違いなかったが、どこか老人を思わせた。

いや、左知子は自分に似ているとも考えた。

正視に耐えなかった。

母のパンティをはき了えた男の腰は醜さが隠されたが、何だか空恐ろしさを感じさせると共に、そこに滑稽さをも用意した。

ぼーと蛍光色の明りが灯っているので、その行為は隠微な感じから少しだけは救われているよう

に見えた。だが梯吉は次に、母の着ていた長襦袢を身にまとった。男にしたら慣れたふうで、見ている間に長襦袢一枚の艶な姿になった。

もう、左知子は見えていられたくなり、その場から逃げ出すことを考えた。

と、その時、梯吉はなぜだか後を振り向いた。

瞬間に左知子は、襖の隙間から顔を引っ込めた。胸がどきどきしていた。左知子は眼を瞠ったままだった。梯吉の唇には紅がさしてあった。

うつすらと顔にはお白粉を塗りつけていたようにも思う。男の顔でも女の顔でもなかった。

自分ではどうだか覚えていなかったが、ともかく気が付いた時には階下にいた。

覗いていたのを見られたのかも知れなかったし、そうではなかったのかも知れない。

よくは判断のつかないことであった。

それよりも、家にいることが我慢ならなかった。左知子は表通りに飛び出していった。

どこをどう歩いたのかよくはわからなかったが気が付いたら、札の辻近くのあめや横丁のあたりにいた。

小路に入り込んだ時、どこかの作業所の奥から、はっかの匂いがした。立て込んだ、低い軒並みの家が小路の両側にはある。

今にも瓦が崩れ落ちそうになった古い家もある。歩いて行くと自分の体が斜めになっているような錯覚に把われる。

家々の軒が傾むいているのであった。

暗闇のことだったが、電柱の明りは不寝番の勤めをしていた。大体が、表扉はガラスの嵌った商店風になっているので、中からは外が見えるはずだった。

カーテンが降ろされた店の奥にあめ製造工場が

あつた。はつかの匂いを嗅いだ時、左知子は、父の梯吉のことを思い出した。父の好物であつた。

爽やかな芳香なのに、この時は腹が立った。

それで香りの立つ工場の一郭につかつかと歩を運んだ。家と家との狭い露地をすり抜ける。

あめ工場を覗き込む。人の姿はなかった。

作業用の手拭いが、暗い板の間の隅に干してあつた。はつかの匂いはこの工場からに違いなかつた。板の間に製品になつた袋詰めのはつか飴なども置かれている。工場は小さなものだった。

この小路に入った時、左知子は朝顔の鉢に足を引っかけた。もう季節は外れているので、そのまま捨ておかれていた。

土も乾いていたとみえ、鉢は引っくり返つた時、根の部分をそのままごろりと、左知子の足元に投げ出した。

蔓を巻きつける細い竹の棒にはもう枯れ切つた朝顔の蔓が申し訳程度に絡み付いていた。

夏の季節の終りをわざとらしく告げているように左知子には思えた。ごとつと音がしたので、少し左知子は余裕を失なつた。

それで、眼の前に積まれた段ボールに目を付けた。荷出し用のもので、ちゃんと折り畳んである。新品であつた。

左知子は、ポケットからマッチを取り出し、段ボール箱の下部に火を付けた。

威勢のいい音はしない。

はじめは煙つたが、そのうち、火は横にも広がり、さらに幅広い火の領域を広げてから、上部にと火の勢いを伸ばして行つた。

静かに、だが確実に、火はのた打ち始めた。

その様を見届けてから左知子は、その場を後にした。逃げる時にまた朝顔の鉢に足を引っかけた

もう、はつかの匂いは嗅いではいなかった。
火の熱さが、あたりの空気を焼いていた。

左知子は気付いてはいなかったが、どこかに父を焼殺する時の思いを抱いていた。

はつかの匂いを嫌悪すること、一時的ではあれ、左知子は父親の肉体の一部を焼いたのであった。その気になっていた。

家に帰り着いたらこの日は白々と夜が明け染めようとしていた。藍白色の空に気付いた時、はじめて左知子は早足になった。

思い出そうとしても、何時間かの空白を埋められなかった。どこをどうさまよい歩いたものか、回り回ってわが家に辿り着いたのである。

いやに、家の中は静かだった。

その静けさがまた気味悪かった。

そつと一階の六畳間を覗いたら、いつものように、父はだらしのない恰好で寝ていた。

あれは、悪い夢を見ていたのだろうか―と左知子は首を傾げた。

これは何でもない、いつも通りの父の寝姿ではない。左知子は父の唇の赤さのことを思った。

呆けた顔で眠っていたが、どうも唇だけが艶めかしいものに思えた。妖しげな時間を過ごしていた父の姿がやはり瞼から離れなかった。

左知子は、もう、着のみ着のまま、汗だつて滲ませているのに、そのまま、一階の三畳間で寝た。二階部屋にわざわざ上つて、そこで眠る気にはなれなかった。

ふと変なことが思い浮かんだ。

いつか、拓郎に会う時、口紅をさし、その時、ティッシュペーパーで自分の唇を拭いた。

二階のくず籠の中にあつたあの薄紅のついたティッシュペーパーは、やっぱり、父の口を拭いた

ものだったのかと考えたのだった。

いや、もつと嫌なことに考えは行った。

父が使っていた口紅に左知子は自分の唇を押し付けたのだった。

途端に、女の長襦袢を着、下着をつけ、唇に紅をさした薄化粧の男の顔が、眼の前に浮いて来た。左知子は懸命に頭を振ったが、もうそれは幻想の中の男の顔ではなかった。

(第六章 了)